

中央ヨコハマ 262-0050

横浜市立図書館



2018974358

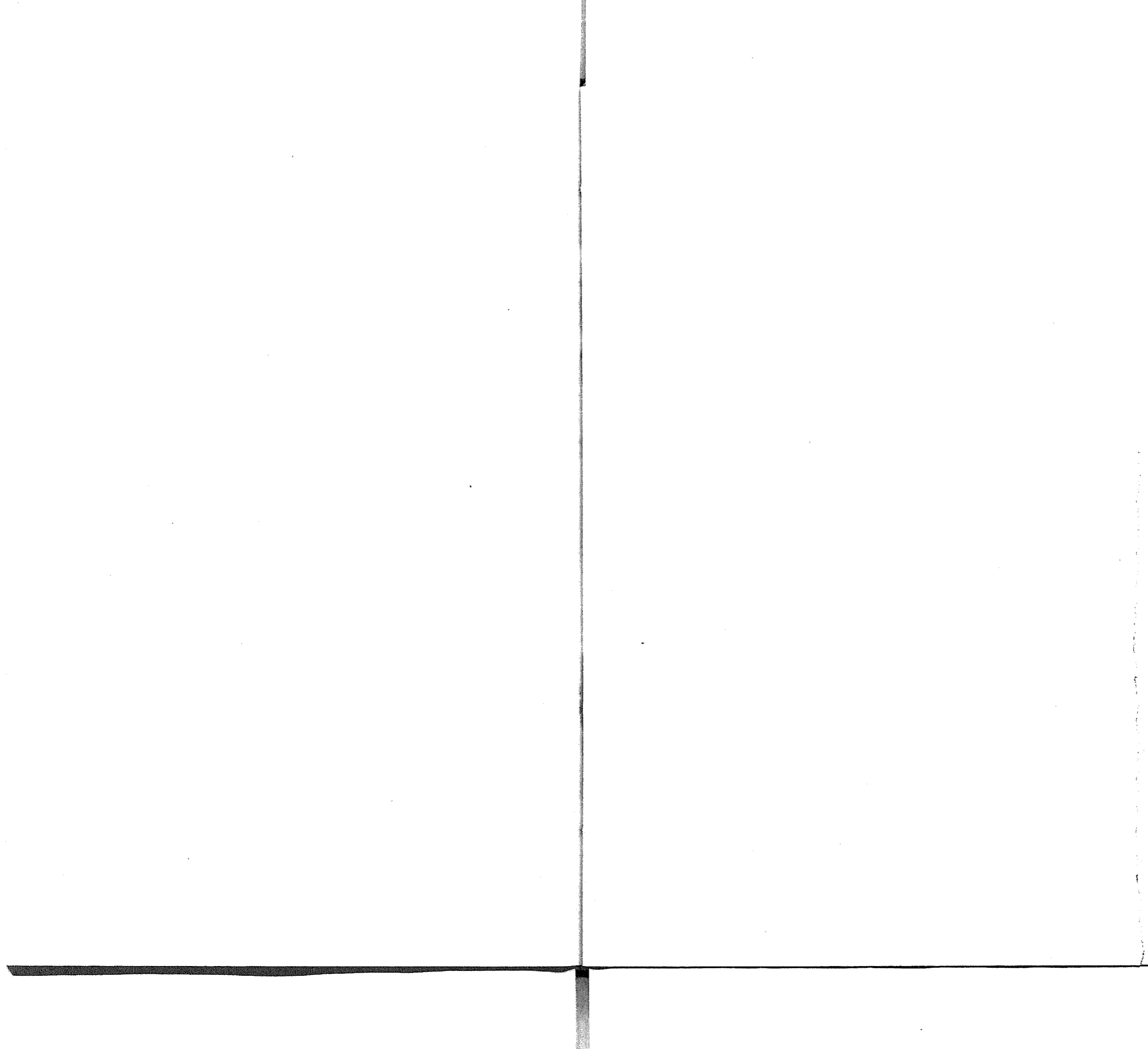
橫濱市震災誌
未定稿 第二冊

2018974358

橫濱市震災誌

(未定稿) 第二冊

2018974358



拜啓 先般來編纂中之震災誌第二冊脫稿致し假印刷に相附し候に
付一冊御手許に差出し候間御多忙中乍恐縮御閱覽之上記事に誤謬
有之候はゞ御指摘被下度此段及御依頼候 敬 具

御訂正之儀は可成至急當役所内市史編纂係迄御届被下度願上候

大正十五年 月 日

横濱市長 有 吉 忠 一

殿

橫濱市震災誌

第二冊

橫濱市役所

横濱市震災誌第二册目次

第二編 災害と遭難

第一章 本市第一方面	一
第一節 一般概況	一
第二節 各町誌	六
一 伊勢佐木町—吉田橋附近の慘狀	六
二 賑町	七
三 末吉町一—七丁目	八
四 長島町—梅枝町—久方町—羽衣町	一三
五 羽衣町—浪花町—松ヶ枝町—姿見町— 若竹町	一五
六 足曳町	一八
七 吉岡町	一九
八 駿河町	一九
九 雲井町	二〇
一〇 蓬萊町	二一
一一 若葉町	二三
一二 長者町一—九丁目	二三
一三 福富町	二六

一四 柳町—吉田町……………	二六	二〇 清水町—霞町—初音町—三春町—黄	
一五 櫻木町一—三丁目……………	二九	二一 金町……………	三三
一六 内田町……………	二九	二二 英町一—三丁目……………	三三
一七 東横濱驛……………	二九	二三 南太田町……………	三三
一八 野毛町—宮川町—福島町—花咲町一—		二四 井土ヶ谷町……………	三五
五丁目……………	三〇	二五 弘明寺町……………	三六
一九 日出町……………	三三		

第二節 慘狀を極めし主なる地帯…………… 三六

第三節 震災直後に於ける主なる避難地…………… 三九

第二章 本市第二方面…………… 四一

第一節 一般概況(慘狀を極めた場所、主なる避難地)…………… 四一

第二節 各町誌…………… 四五

一 戸部町一—七丁目……………	四五	七 岡野町—南幸町……………	五〇
二 花咲町七—十二丁目……………	四七	八 平沼町—材木町—仲ノ町—尾張屋町……………	五一
三 櫻木町四—七丁目……………	四七	九 西戸部町……………	五二
四 内田町—橋町—緑町……………	四八	一〇 久保町……………	五三
五 高島町一—十丁目—裏高島町……………	四八	一一 老松町—月岡町……………	五五
六 浅間町……………	四九	一二 宮崎町……………	五六

第三章 本市第三方面…………… 六六

第一節 一般狀況…………… 六六

第二節 關内…………… 七〇

第一項 關内西北部……………	七一	四 常盤町……………	八〇
一 港町……………	七一	五 住吉町……………	八一
二 真砂町……………	七二	六 相生町……………	八三
三 尾上町……………	七二		

七 太田町	八四	一 北仲通	九三
八 辨天通	八五	二 元濱町	九三
九 南仲通	八六	三 海岸通	九四
一〇 本町	九〇	四 境町	九五

第二項 港 内	九六
---------	----

第三項 關内東南部(山下町)	九六
----------------	----

第三節 釣鐘新田南部及西部

一 吉濱町	一〇八	八 三吉町	一四
二 松影町	一〇	九 千歳町	一五
三 壽町	一〇	一〇 山田町	一六
四 扇町	一一	一一 富士見町	一七
五 翁町	一一	一二 山吹町	一七
六 不老町	一一	一三 真金町—永樂町	一八
七 萬代町	一一	一四 南吉田町四—七ツ目	二二

第四節 市の西南部

一 堀内町	一一五	三 磯子町	一三七
二 瀧頭町	一一六	四 岡村町	一三九

第五節 蒔田 大岡町方面

一 蒔田町	一二〇	二 大岡町	一二一
-------	-----	-------	-----

第四章 本市第四方面

第一節 一般狀況

第二節 山手町

第三節 北方 本牧 根岸方面

一 北方町—上野町—千代崎町—諏訪町	一二〇	三 根岸町	一二〇
二 本牧町	一二五		

第四節 中 村 町……………一五四

第五節 石川町 石川仲町……………一五八

第六節 元 町……………一六三

第五章 本市第五方面……………一六五

第一節 一般 狀況……………一六五

第二節 各 町 誌……………一六六

第一項 青木町―高島町九・十丁目―表高島町―林町―山内町……………一六六

第二項 神奈川町―新浦島町―千若町―橋本町―山内町……………一六三

第三項 子安町……………一六六

横濱市震災誌第二册目次終

横濱市震災誌 第二册

横濱市役所編

第二編 災害と遭難

第一章 本市第一方面

伊勢佐木町―賑町―末吉町―長島町―梅ヶ枝町―久方町―羽衣町―浪花町―松ヶ枝町―姿見町―若竹町―足曳町―吉岡町―駿河町―雲井町―蓬萊町―若葉町―長者町―自五丁目―至九丁目―福富町―柳町―吉田町―櫻木町―自一丁目―至三丁目―内田町―櫻木驛構内―東横濱驛構内―野毛町―宮川町―福島町―花咲町―自一丁目―至六丁目―日ノ出町―清水町―霞町―初音町―三春町―黄金町―英町―南太田町―井土ヶ谷町―弘明寺町

第一節 一般 概 況

横濱の伊勢佐木町通りと言へば、東京淺草の仲見世、大阪の千日前とも匹敵して、横濱

での賑やかな明るい街である。此の通り一帯を中心とする隣接各街は、大商舗を初めとして諸興行物、飲食店等、櫓を並べ、四時の遊覧場所として横濱を代表してゐることは、遠い地方にまで知られてゐる。明治三十二年八月十二日の大火災があつて、この邊が焼き盡されたことは忘れられぬことである。其の時の火元は雲井町一丁目、丁度風が強かつたので、十時間と経たぬ間に、足良町、久方町、賑町、長者町、梅ヶ枝町、若竹町を焼き、更に火勢を加へて伊勢佐木町を襲ひ、同時に姿見町、吉田町、柳町、福富町に延焼し、羽衣町、蓬萊町をも焼き盡して、目抜きの場合三千七十三戸を灰にしてしまつた。開港以來の大火に、一時は市街も荒びれたが、次第に復舊するに及んで、返つて舊觀に倍する壯麗華美的の建物に改まつて、建築構造等も新らしく工夫され、再び前繁榮に歸つて、觀客顧客を喜ばしてゐたのである。しかし、九月一日の震災の前頃は、何處にも不況の聲が叫ばれ、大小店舖、飲食店、興行物等は、苦策を施して、景氣の挽回に餘念もなかつたのである。然かも九月四日、五日は、南太田町、杉山神社の常例祭と、南吉田町、日枝神社のお祭が續くので、各商店はお祭に景氣づけて、不況を挽回しやうと、それ／＼思ひ／＼の新案の窓飾りを凝らし、祭日を樂しみに待つてゐたのである。が、たのもしい期待は外れて、九月一日あの恐しい大地震が襲うて來たのであつた。天地が裂けるやうな激震は、大小家屋の

區別なく破壊した。間もなく四方八方から猛火が起り、東南の烈風に誘はれ、火神のやうに荒れ狂つて、瞬く間に全市は悉く火の海と化し、幾萬の生靈を奪ひ去つたといふ暗黒界を現出したのである。

この日の慘狀を物語ることは、今日できへ戦慄を覺えずにゐられない。殊に伊勢佐木町方面の如きは、賑やかな盛り場だけに、家屋が稠密してゐたので、逃げる餘裕もなく、爲めに家屋の下敷にされ、或は戸外へ逃げ出さうとして、逃げ道を遮られ、生きながら焼死する傷ましい光景が各所で見られた。眞つ先に久保山方面、公園方面等に逃れた者は、生命だけは助つたが、逃げ後れた者は襲ひかゝつて來る猛火に、哀れにも焼死した。逃げ遅れて辛うじて吉田橋外、その他の橋の附近の船に避難して助つた者は極めて少數であつたといはれてゐる。

以上は伊勢佐木町通りと、隣接町域を中心として見た慘狀である。更に眼を北部花咲町、櫻木町方面に轉ずれば、この方面には避難所がかなりあるので、横濱驛構内や、櫻木町驛構内や、伊勢町方面に逃げたものは助つたが、逃げ遅れた者は、途中猛烈な旋風に襲はれて倒れ、焼死したものは多數であつたといふことである。伊勢佐木町を中心として西部方面、即ち野毛山、宮川町、日出町、初音町、三春町、黄金町の一帯に亘る地域を観ると、

其の災害は甚大なものであるが、是等は概して附近に高臺があるので、安全に避難することが出来たのである。逸早く水道貯水池の高臺を中心に、南太田方面一帯に逃れたものは、安全に避難し得たが、逃げる時機を失つた者は、空しく焼死し、その数は少くなかつたといはれてゐる。この方面に於て起つた天神坂の慘狀、省線敷地の空地、末吉橋、黄金橋附近の慘狀、及び日出町の慘狀は、實に見るに堪えないもので、焼死體が四邊に轉がつてゐる様は、傷ましい光景であつた。

直後に於ける主なる壓死・焼死場所は左の如し。

(イ) 建築物中に於ける壓死・焼死者數。

服部會社内	一六名
長者町郵便局	五〇名
左右田銀行支店內	一二名
劇場 喜樂座	三〇名
角力常設館	一〇名
劇場 朝日座	四名
野澤屋吳服店	二六名

越前屋吳服店 七名

(ロ) 空地及び護岸船舶に於て焼死した數。

吉田橋一丁目大岡川岸船舶及護岸	約五〇〇名
黄金町末吉橋附近省線敷地空地	約四〇〇名
東耕地附近天神坂	約三〇〇名

一 伊勢佐木町 (吉田橋附近の慘狀)

吉田橋に近い伊勢佐木町の町民は、吉田橋を渡つて避難場所を探さうと思つて續々と集つて來たので、橋上は忽ち身動きも出來なくなつて、人々は苦しい叫びを擧げながら押し合ひへし合ひしてゐた。その中に火は四方に起つたので、人々は一層狼狽した。蓬萊町方面にも火を發した。既に水道は斷たれ、自動車ポンプ破壊されてゐたから、防火につとめることは全く不可能になつてゐた。もう猛火は益々強く四方から襲つて來るので、このまゝ逃げる事の出來ない死地に落されたやうに悲鳴を擧げた。しかし、生きんとする心で、逃げ道を探さうと大騒をしたので、そのまゝ押し潰されて死で行く子供や老人があつた。

四邊は人間世界と思はれぬ物凄い光景が演じられた間に、早く公園へ公園へと誰れか叫ぶ聲に、人々は一齊に公園に向つた。公園内には幸ひ破壊した水道の鐵管から水が出てゐたので、人々は水に浸つて火を避けることが出來た。

二 賑 町

賑町一・二丁目伊勢佐木町通につゞいた大通りで、各種の商家、飲食店軒を列ね、伊勢佐木町に亞いで賑ふ市内屈指の町である。激震の起ると、町内の家屋約七分通りは倒潰し、其の他殆ど大破し、半潰れの建物は日本晝夜銀行其の他十數戸であつた。火は忽ち町内數個所より發火し、駿河町方面からも延焼して、忽ちのうちに一戸も残らず燒盡した。死者の數は約七十人を算したが、此外噂に據れば劇場や活動館に於て、座員や觀覽人を合せ二三十人の死者を出したといふ事である。住民の多くは新吉田川の橋や、中村川の橋を渡つて、中村町の高臺に避難し、一部の者は之と反對の側なる大岡川の橋を渡つて、久保山、水道山に避難したのであるが、この邊の橋は早くから燃え出したので、逃げ遅れて來た者は、遠廻をして漸く逃げ延び、崩れた川岸に身を隠して、辛うじて命拾ひをした者もある。川幅は比較的廣く、中村川などに較べると、燒死した者は極めて少なかつた。死者を出したる家は、一丁目の西洋料理店太田音吉方で、老母、妻、娘、孫、雇人等計五人、二丁目の衣類商吉田甚藏方では、夫婦及若夫婦、全理髮業鈴木彦次郎方では、夫婦及雇人二人、全荒物商井上染吉方では、妻及子息二人、雇人一人等である。同町は土地柄だ

八
けに、震災後の復興は最も早く、一年半で九分通りの民家が建つて、震災前の賑ひを早く取り返へした。

三 末吉町 一七丁目

末吉町一丁目 最初の大震動が襲來した時、町民等は一時氣を失つたやうに、ぼんやりとしてゐたが、やがて氣がついて、安全な避難所を探し始めた。而しこの町は街路が狭い上に、家屋が稠密してゐるので、どつちへ行つても逃げ場がないやうな所なのであつた。人々は我がちに、旭橋通りに出て、伊勢佐木町足曳町方面から雪崩れ來る數千の群集と押し合ひながら、水道山方面へと向つたのである。然るに第一震に旭橋は陥落せんばかりの大破損をしてゐたが、夫れにも氣づかぬ避難民は、危険もさらに考ふる暇なく、橋を渡つて向岸にある空地に避難した。此の空地に來てからは、避難民中、日出町を差して逃げる者と、此の空地を安全と思つた者との二組があつたが、日出町へ行つた者は天神坂に差かかると、行先はずでに猛火に遮られて、多くは焼死した。旭橋より天神坂までの焼死者中、末吉町一丁目の住民のみで百十八名に達し、町内で壓死したものは、十四五名もあつたとの事である。但し町民中、水道山野澤山太神宮に避難したものは、

辛くも死から逃出ることが出來たのである。町民中最も哀れな家を調べて見ると、同町の廣瀬直吉氏一家六人、天神坂に於て抱き合つたまゝ焼死したのを始め、渡邊安五郎氏が商用で留守中、六人の家族が同じく天神坂で抱き合つて焼死した。殊に山下伊津氏の如きは最も氣の毒なもので、出産見舞に田舎からはる／＼訪れた母親までが、無残な焼死を遂げさせたとのことである。又壓死の主なるものは、同町の橋爪氏一家四人であつた。尙ほその外にも下敷となつて、悲惨な最後を遂げたものゝ中に、溝畑と云ふ小邸宅の玄關に訪ねた一人の客が、挨拶の言葉も終らぬ間に家屋倒壊し、其者はそのまま無慘な最後を遂げたと云ふ話もあつた。尙ほ他に一つ特記しなければならぬことは、同六番地の鹽崎染物工場である。この地區は火の手が稍遅かつたためか、伊勢佐木町方面より旭橋を渡らんとする避難民は、同工場焼失前は安全に其前を通過するを得て、天神坂及び大岡川邊空地に遁れることが出來たのである。而し第二次の避難民は、同地に差かゝるや、工場は今を盛りと猛炎に包まれて居たので、更に取つて返して、反對の方向即ち足曳町方面より中村町へ逃れたので、安全を得たのである。故に同工場の焼失は、取りも直さず避難民の生命を助けたやうであるから、一寸興味ある記録として書いておく。

末吉町二丁目 二百三十名と云ふ屍を残した二丁目の傷ましい惨状は、到底語るにも忍びないくらゐだ。編者は數度現場に行つて、當時遭難して生き残つた町民の追憶を辿り、一方七十七の高齡に達した同町二丁目土屋衛生組合長が、市役所から依頼されて震災の状況と町民たちが體驗した有りの儘の遭難實話を集めたので、それらの集つた遭難記の二三と私の實見した惨状を追憶することにしよう。

末吉町二丁目は南は末吉橋筋と、北は黄金橋筋との間に挟まれてゐて、町家の中には、主に古びた二階家が多く、戸數は四百二十軒もあつた。第一震動で、家屋は殆ど倒潰したが、第二震、第三震のために全く破壊されてしまつた。梁に押し潰されて、出やうとしても出ることの出来ない苦しい人々の呻き聲は、そこ／＼に聞えた。その凄惨な様は言語に絶えない。折柄の旋風は、三丁目と二丁目の境から起つた。三春町からは猛火を導いて、危険は刻々に迫つて來た。骨肉たちが梁下に下敷となつてゐるのを助けやうとしてゐた者たちも、最早自分の生命を思へば、その場に一時もゐられなくつて、別れを告げ、涙乍らその場を逃れて行く様も哀れであつた。而し逃れた町民達は、安全地の目的もなく、群集に交つて集つたが、やがて黄金橋を渡つて省線の空地に避難して、ここぞ安全な場所と思つてゐた。すると意外にも、暫くして、猛火は盛んに襲つて來て、四百

名の町民は哀れにも黒焼になつて惨死したのである。多くの惨死者中にゐて、九死に一生を得たといふ不思議な話がある。談に依れば、當時空地の惨死者は多くは家財を身に纏つてゐた爲め、猛火を容易に導き、終に大事に至つたのだと云ふ事である。殊に空地の片端に一材木商があつたので、材木に火がついたためである。この時既に八方は猛火に包まれて、逃げ道もなく、橋近くに關口齒科醫師のセメント塗りの建物が有るを見て、人々は安全な鐵筋コンクリート建物と見違へ、建物際に身を寄せた者もあつたが、聽て猛火に襲はれて、一人として助つたものはなかつた。同町での全滅の災害を被つた悲惨な家としては、十九番地の今井磯吉氏の一家二名、二十六番地の長森重道氏一家五人、二十八番地磯部温泉の一家六名、同小林榮太郎氏の一家十名、同平野金作氏の一家四名、三十七番地小田靴店一家六名、十八番地某時計店の一家五名である。此の外一家に二名三名と云ふ犠牲者を出したのは、數戸あつた。でなくとも、多數の家族を失つた家は、平野榮太郎氏の四名、喜田仁三藏氏の六名、二十八番地某家の四名、高田傳氏の四名、加藤庄太郎氏の五名等である。殊に無慘を極めたのは、按摩業福井正氏の家で、五人の盲人が枕を並べて焼死してゐた。何といふ哀なことまで有つたらう。その他、盤の龜裂當時、末吉橋も黄金橋も、初めは破れたばかりで、漸く通ることだけ出來たが、間もな

く焼け落ちてしまつたので、逃げ後れた人は逃場を失つて、無惨な最後を遂げたのである。この町の生存者は、他の町より一層苦心をして、急坂や野毛道を辿り、水道貯水池や久保山方面に逃げた者が多い。然にかられず家財を捨て、生命大事と逃げた者は、助つたものであるといはれてゐる。今此處に二町民の事實物語りを書き記すことにする。

私は明治四十二年八月廿五日より、大正十二年九月一日迄横濱市末吉町二丁目十五番地及同廿七番地の二階家と平家建とに住んでゐました。二階十五番地の家には長男と娘外子供五人が住んでゐました。九月一日の大震で、二階家はまる潰れとなり、三女は其の下敷となつて焼死いたしました。其の時長男は町内の祭りの仕度で磯子町の神輿の掃除に行つて留守で、私は一人で三女を救ひ出さうとしましたが、何分にも手の付様もなく、その内末吉町三丁目から火災が起り、續いて十五番地二階の裏の澤田ペン製造店からも火災が起つたので、どうすることも出来ず、孫二人と嫁を連れ黄金橋を渡りましたが、最早末吉橋は焼えてゐる最中でしたから、日出町裏の神社へ逃げました。すると爰にも又火がやつて來ましたから、十全病院の横迄逃げました。そこで又愕かされたことは、烈しい旋風が起つたことです。一人の方がトタン屋根の下敷となつたのを助けてやりましたが、遂に死んでしまひました。私は又そこを逃げ出し、水道山に來たのは午後六時頃でしたが、焼死した孫娘が、どうしても忘れられませんでした。

私は午前十時半頃、得意先に炭や薪を持つて行つた歸り道、丁度日出町と初音町との界に來ると大震にあつて、荷車は引けないので、黄金町の省線の敷地に其荷車を捨て、大急ぎで家に歸りて見ると、私の家は倒れてゐて、妻子が下敷となつてゐたので、大急ぎで妻子を救ひ出した。隣の某氏の母と嫁と子供、都合四人も下敷となつて助けてくれと、悲鳴を上げてゐるので、屋根に駆け上つて、瓦を剥き、漸く其四人を助けることが出來た。一安心と思つて居ると、某氏の娘六歳が是も下敷となつてゐるといふので、私は此時既に四方が火になつてゐるのも構はず、其の子を助けてやりました。それから私達一家は火の中を逃げて、漸く野澤屋の別荘に避難所を得ました。

私は澤山死人のあつた中で、親子が助かつたことを神様にお禮を申上げました。
末吉町の主なる歴死焼死者を出した住民中、三丁目は四十一番地の高井文藏一家六名、同番地安室海次郎氏一家四名、四十六番地荒井宇内方一家三名、その他に名の知られぬ一家全滅十數戸に及んだ。

四 長島町 梅ヶ枝町 久方町 羽衣町

長島町 長島町邊も慘狀を極めたのは、他の町と同様であつたはいふまでもない。同町の一丁目から六丁目までの地盤は、殊に甚しい龜裂を生じ、三丁目四丁目に亘つて水道鐵管が破裂したのには、町民も一層苦しめられた。而して長島町の町民は何處へ

避難したかといふと、大抵は久保山方面や、石川町の山上に向つたので、それらへ安全な避難地を得たが、吉田橋方面へ向つた者はみんな焼死したさうである。この町の壓死者焼死者は百十四名で、二丁目の五十嵐光五郎氏の一家族四人は枕を竝べて、壓死してゐた。北村梅吉氏家族四名も同様である。三丁目の渡邊氏一家は壓死六名に及んだ。尚竹口重太郎氏の一家は五人も焼死してゐた。

梅ヶ枝町 同町は伊勢佐木町に續いてゐるので、一般に伊勢佐木町と呼ばれてゐる。相當な店舗があつて賑やかなだけに、多くの慘死者もあつた。都屋呉服店で一家十一人壓死したのを初め、一家全滅の家が四五戸もあつた。壓死者の多かつた理由は、激震と共に兩側の家竝が申し合せたやうに街路に倒潰したので、真先に外に飛んで出た人々は、梁や庇などの下敷になつたといふことである。町民壓死者は總て八十八名であつた。通行人で下敷となつて焼死した者は約二百人もあつたが、その原因としては、店の前面に柱が少かつたこと、廣告看板が殆んど道路の方へ倒れたためとであると云はれてゐる。

久方町 災前同町は戸數六十五戸、人口四百人で、建物としては二三倉庫があつたばかりで、大建物はなかつた。多數家屋が倒潰したため、壓死者多數あつた。

羽衣町一丁目 同町の壓焼死者は百二十五名あつた。一家全滅と判つた家族は、卅三番地若柳亭一家十名、二十一番の吉岡哲三郎氏一家五名、杉山時計店の一家六名、二十一番地増田平八郎氏一家四名、齒科醫太田薫氏一家四名、安村七郎氏一家六名、高堀義一氏一家二名、早川三作氏一家四家であつた。助かつた町民の大部分は公園櫻木驛等へ避難したのであつた。

五 羽衣町 浪花町 松ヶ枝町 姿見町 若竹町

羽衣町 浪花町、梅ヶ枝町是等町々は、地震突發と共に家屋殆んど全潰した。殘存した家屋は、電車通りに四五軒あるのみであつたが、それが忽ち火焰に包れてしまつた。猛火に取巻かれながら、煉瓦建の太田倉庫だけが最後まで残つたのは、不思議なくらひであつた。東本願寺別院辨天社も地震で倒潰してしまつた。辨天社境内及東本願寺別院境内の空地へ逃れた町民たちは、一人残らず死を遂げた。其の他死地より免れて避難した町民は、一團は公園に、一團は野毛山方面に、一團は大岡川に、他の一團は櫻木町に逃れた。是等各方面に逃れた者の中、一部分は助つたが、途中河の中へ飛び込んで死んだ者もあれば、黒焦げになつて死んだ者も少くない。兎に角、人口五百名しかない羽衣

町二丁目だけで九十人の死者を出したのは、慘害が他よりはげしかつたといはれてゐる。

一六

姿見町 地震前同町の戸口は四百人の七十世帯で、目だつた建物としては、富士旅館、富貴樓常盤亭、吉野屋汁粉店等で、其の他常に客の入込む旅館料理屋、其他飲食店等七十餘軒もあつた。此等の飲食店、旅館料理屋等の建物が、一時に重なり合つて倒れたのであるから、壓死者が多數あつたことはいふまでもないことだ。倒潰家屋のために、逃げ路を遮られてしまつた町民達は、下敷にされた我が子さへ助けけてゐる暇もなく、各自思ふまゝに逃げ道を求めやうとあせつたのであつた。而して倒潰と殆んど同時に、猛火が四方に上つたので、そのまゝに焦死した者も多かつた。避難民のうち、公園及櫻木驛方面へ逃げたものは、大抵は助つたが、本願寺境内に逃げたものは、みんな焦死をした。こゝに皆さんに知らして置きたい哀語があるから、略記しておくことにする。

それは火災が暗黒の大空を物凄く照してゐた二日の夜の事であつた。中村町邊青年團員の一人が、黒焦げ死體が山のやうに重つてゐる東本願寺の前を通かゝると、『助けてください』といふ悲しい微かな聲が聞えて來た。彼は氣味悪く思つたが、それは確に人の聲だといふことが判つたので、思ひ切つて境内の中へ入つて行つた。聲は

屍の中から聞える。彼は勇氣を出して、死骸二つを除けると、一人の少女が姿を現した。彼れは一時喫驚したが、少女を勞はりながら、哀しい話を聞かされた。この少女は横濱市姿見町二丁目七十二番地染物業友禪屋號こと須藤森太郎氏の一人娘で、當時市内吉田小學校尋常六年生の須藤喜恵子十三歳であつた。喜恵子の父は同校獎勵會の理事を勤め、夫人と共に世話すきの人で、町内や學校の事に盡力してゐた。喜恵子は一人娘として幸福な日を送りながら、來春は女學校へ入學すると云ふので、其の準備中だつた。ところが今度の震災に遭つて、多くの人々と共に既に焼死するところであつたのを、子を思ふ兩親の愛の力に依つて、東本願寺前の數百の死人の中から、只一人の生存者として救はれたのであつた。喜恵子は涙ながらに次のやうに語つた。『私はお父さまとお母さまと一緒に、火に追はれながら、漸く學校裏の東本願寺前迄逃げてきましたが、もう數百人の人達が逃げ場を失つて、慄へて居るところでした。其處へ火が又襲つて來ましたので、三人は伊勢佐木町通の方へ出やうとしたが、龜樂煎餅の店が燃えてゐました。そこで千秋橋の方へ逃げやうとしましたが、橋も焼け落ちてゐました。兩親は死を覺悟されたと見えて、『お前だけはどうしても生きていておくれ』と謂つて、泣いてゐる私を地割れした所へ入れて、其の上から父母が掩ひ被さつたのです』と、さめ／＼と泣

一七

いて語つたのである。

若竹町 當町も同じく羽衣町のやうに料理店や飲食店やが多く、人家も稠密してゐたので、第一震で家々は殆んど悉く倒潰し、同時に料理店飲食店から火炎が續いて上つた。烈風にあほられた火炎は、忽ち町内中に擴がつた。町民は目的もなく逃げた。公園地・久保山その他安全地帯に避難した者は助つたが、中途焼死した者は少くなかつた。同町は三百人の町民中、歴死者・焼死者四十名を出した。尙此の町で悲惨な出来事は、村田天ぶら屋主人を初め、家族雇人合せて七名が救ひを求めつゝ下敷になつたまゝ焼死したことである。

六 足 曳 町

當町は各町の内でも災厄の激しかつた町で、震動突發と同時に、全家屋百七十八戸中、殆んど全部倒潰し、僅かに二十三戸を残したのみであつた。而して猛火は四方から忽ち襲つて來て、全町は火の海に化し、續いて旋風が各所に起り、瓦や焼トタンが宙へ飛ぶといふ物凄い光景に、町民達半ば氣を失ひながら、思ひ／＼の所を指して逃げたが、七百六十餘人の町民中、四十一名の焼死者を出した。災後十月中同町に、私設十數戸の假小

屋が建てられ、その後六十七戸となり、十二月末から翌一月にかけて百十二戸を算するに至つた。前記の外町内の死亡者中に、三十年有餘年間、教育事業に従事された吉田幼稚園主持月直次郎氏があつた。同氏が、同園庭に於て無慘にも殉職されたのは、如何にも惜む可きことである。

七 吉 岡 町

當町は震災前は戸數四百五十、人口二千五百を有した三十年前の埋立地で、地盤の脆弱なことは、伊勢佐木町と同様で、道路は甚しく龜裂し、濁水の深い所は三尺に達したといはれてゐる。倒潰家屋は四百戸であつた。死者百五十名、大部の者は下敷となり、後刻焼死したものである。火の手は午後一時に起り、二時前までに燒燼し、辛うじて一命を得たものは、多くは、日本橋を渡り、或は横濱橋を渡り、中村町方面に避難したもので、逃げ遅れたものは、吉田川の中へ浸つて、やうやく一命を取止めた者もある。

八 駿 河 町

駿河町一丁目及び三丁目は、新吉田川に沿ひたる街で、災前は戸數約百、人口約五百を

有して、材木店、運送店などの多い町である。激震の起るや、全町の家屋約八分通、倒潰し、護岸は道路と共に崩壊し、武藏橋、横濱橋は何れも大破した。尋いで三個所より出火し、吉岡町方面に延焼して、全町残らず焼失した。住民の多くは大破した橋々を渡り、更に中村川の橋々を渡つて、中村町の丘地に遁げ上ぼつたが、横濱、武藏の二橋に火の掛つた後は、悉く日本橋を渡り、若くは川舟の助を得て、辛くも通れた。河水中に浸つて一命を取止めた者も尠からずあつた。死者約五十人、其の多くは第一震で壓せられた者である。町の有力者にして市會議員たりし和田栄作氏方では、夫妻子女合せて五名、外に雇人二名、枕を並べて惨死し、一家全滅の悲運を見た。其の外全滅の家が兩三軒あつた。町の釣舟業生方治三七といふ老人は、瀕死の四人を救つた上、舟を操つて、火に追はれた十數人を助け、大に町民に感謝された。

九雲井町

災前當町は戸數二百四戸、人口六百四十人を算し、特記すべき程の建物なく、吉田川を隔て、永樂町と向ひ合つて、山吹、長島、武藏の三橋を通じてある。災害は全潰全焼、隣町同様に惨狀を呈し、震害後間もなく、吉岡町、眞金町、遊廓方面よりの猛火に包まれ、午後三

時、悉く全町は火の海と化した。町民の避難方面は、主として中村町、山手方面であるが、時を失したるものは、すでに山吹、其他二橋の焼失のため、全く逃げ路を失つて、焼死者三十名を出した。

一〇蓬萊町

大岡川と吉田川との交流一角を起點として、一丁目から四丁目まで連なつて居た蓬萊町は、全戸二百七戸、千餘人の町民があり、本市では繁榮の町區として數へられてゐた。今次の震災では、この地區一帯は恐らく惨害地の中心と云つても決して過言ではないであらう。大地震が襲來すると同時に、某家の土藏が唯一つ残つたゞけで、町内の家屋は全部倒潰したために、多く壓死者を出した。當町は古への埋立地なので、地盤が弱く、それがために各所に龜裂を生じ、河岸が崩壊して、川水が流出し、町民は逃げ場を失つたので、一層死者を出した譯である。地盤龜裂の主なる地帯は、大岡川邊一帯で、幅三尺深さ數尺も龜裂して、護岸は一間乃至二間程も河中に墜潰した。家屋倒潰後、火は間もなく一丁目六番地方面より發した。瞬く間に豊國橋方面に向つて、其の他一帯を舐め盡し、一方辨天裏の發火は、烈風に誘はれて、一旦は西北に向つて、燃え狂ふや、更に迂廻して

二・三・四丁目と舐め盡した。蓬萊町全滅は三丁目即ち鶴ノ橋附近で終結を告げたのである。町民達は第一震と同時に横濱公園方面に逃れたものは、大部分は辛うじて助つた。而して第二震で豊國橋は墜落してしまつたので、遅ればせに逃げて来た二十餘人の町民達は、橋の袂まで来た時、行く事も歸ることも出来なくなつて、無惨な焼死を遂げたのであつた。その他の避難者は、町内附近の東本願寺別院長者町郵便局辨天社境内等に避難したが、是等は他の避難者と同様に、全部焼死した。町民の死體は、溺死者七十人、壓死者五十人と判明した。更に同町内に一家全滅の悲遇に陥つた家は、次の如くである。

同町三丁目十一番地の青年會長佐藤貞次郎氏は一家七人焼死。本願寺附近で厄に罹つた金剛米太郎氏は一家五人焼死。鶴巻貞次郎氏は一家五人壓死。船舶に避難した山田團次郎氏は一家五人溺死。元同町衛生組合長醫師大橋武造氏も一家五人打揃つて本願寺別院前に於て焼死。震災後九月十日前後には町民續々と歸つて来て、美しい相互扶助の心を抱き合つて、町の復興に努めた。

一一 若葉町

若葉町方面の災害は、隣接區と同様に、建物地盤の破壊を初め、水道栓の破裂等甚だし、従つて町民の遭難も惨憺を極めた。避難方向は概して山手即ち水道貯水の高臺を目掛けたものであるが、後刻になつて日出町の發火に遮られて、反對の中村町方面に避難したものも多く、殊に最初はかの大多數の死骸を爆らした省線敷地に大方集つたが、それは一時で、危険刻々に迫るを知り、前記の方面に轉ずるに至つたのである。町内建物等の下敷になり、壓死したものの約三十名で、比較的僅少であつた。この町も災後町民一致して相互に扶助して、町の復興を圖つたのである。

一二 長者町 一一九丁目

	(震災前戸數)	(人口)	(行衛不明)	(壓燒死者)
一丁目	二二〇戸	一〇〇名	—	一〇
二丁目	一一二戸	五六〇名	—	八
三丁目	二〇〇戸	八〇〇名	一〇	六
四丁目	一四〇戸	五三〇名	—	七二

右の表の如く同町一・二・三丁目の死者が少かつたといふことは、道路の幅が廣く、他町

と較べて、避難するのに何んの支障もなく、避難地の根岸方面に通ずる車橋扇橋は土橋であつたのと、四丁目を除いては、火災の比較的遅かつたので、避難中脊に負ふ荷物さへ断念した者は、何の苦もなく安全に避難することが出来たのである。四丁目は千秋橋が大破して通行を遮られ、殊に同町は火の手が早く、倒潰家屋が多かつた爲め、七十二人の壓死があつた。

當町附近一帯は、大震の爲め全家一齊に倒潰し、地盤の龜裂も甚しかつたので、可なり多數の壓死を出した。猛火は足曳町方面から、早くも襲つて來たので、町民は安全地である中村町に避難した。同郵便局は、あまり新しくない煉瓦造りの建物だつたので、無惨にも細かに破壊して、局の前を歩いてゐた人が二十四名も煉瓦に打たれて慘死した。勿論局内の事務員も殆んど全部下敷にされたが、漸くのことゝで割れ目から逃れ出た十數人局員等は、必死となつて救助に従したが、猛火は忽ち局の四邊を包んでしまつたので、もう手の付けやうもなくなつてしまつたのであつた。今となつては、彼等は自分の身が危険に迫つたので、一團となりて、互に助け合ながら避難地へ向つた。しかし吉田川に來ると、頼みにした千秋橋は既に焼失してゐたので、こは一大事と、山吹橋へ駆付け、漸く橋を渡つて、安全な唐澤山に避難した時は、午後二時近くであつた。

長者町六丁目 六丁目一帯は震動も激しく、五十戸の家屋は全部倒潰したので、壓死者も澤山あつた。又電車の兩側は大陥没を爲し、數間の龜裂が出来た爲め、町民の中には逃げ遅れて焼死を遂げた者もあつた。同町藝妓屋吉倉氏の抱人などは、五人も一緒に黒焼けになつて死んでゐた。

長者町七丁目 横濱演劇場の中心を占めてゐる賑やかな所で、附近に常設館喜樂座・電氣館・左右田銀行等、相當の建物があつたが、忽ち焼野原に化した。町民は一は中村町方面競馬場、一は日出町に出で、水道山へと避難した。同町の三河屋酒店は四人、櫻本の藝者屋は四人、その他數名、壓死者を出した。

長者町八丁目 八丁目の一劃の慘狀も他と同様であつた。即ち第一震動と共に全家屋は倒潰して、町民十五名の壓死者と焼死十名を出した。町民は同じく長者橋を渡つて、日出町を通り、水道山に避難したが、町民中日出町三丁目で焼死した者は多數あつた。

長者町九丁目の慘狀 末吉町方面の慘害に次いで、同町の慘狀も傷ましいものであつた。町民達が避難地へ行くのに、唯だ一つの橋長者橋が墜落しかけた時、彼等は行くことも歸ることも出来ず、互に押し合つてゐた。疲れ切つた老人や女子子供は、橋上に

倒れて、そのまま死んでしまった。百四番地では、一丈餘りの防火石垣が俄然倒潰して、十餘人の町民が無惨にも壓死した。八十四番地下駄商太田菊太郎氏一家は、雇人共に六名慘死した。九十二番地小林一家は五名、又百四番地の洋食店新田氏の一家は五名、其他身元不明の者五名が壓死した。震災前の人口千二百餘人中、百三十五名の壓焼死者を出したのである。

一一三 福 富 町

福富町の慘害は、死者六百名、行衛不明者二百餘名を出した。第一震と共に、七百戸の家屋は、約八分通りは倒潰し、火災は忽ち二箇所から發り、全町間もなく火の海と化したので、骨肉さへ助ける裕餘はなかつた。一家全滅の家は三十世帯もあつた。腕の鋸引悲惨事も此町であつた。斯うした危急の中に、十六歳の少女と、十二歳の少年とが、四歳位と一歳位の女兒二人を救つたといふ美談があるから、特に讀者諸君の前に紹介する。その可憐な少女は、福富町三丁目百九番地波多野吉三郎方の雇人安田きみ^{十六}であつた。きみ子は主人一家がどこへ避難したか分らなくなつたので、彼女がたつた一人避難地へ逃れて行く途中、道路に捨てられてゐる二兒を見出したのであつた。情深い

彼女には、自分の身がどうなつても、このまゝ二兒を見捨て、行くことは出来なかつたので、一兒を脊負つて一兒を抱き、一生懸命になつて、安心な避難地へ急いで行つたのである。丁度この時福富町三丁目百五番地保坂市太郎方の雇人城田三男^{十二}も避難の途中であつたが、二人の子供を連れて、不安げに難沓の中を急いで行く少女の姿を見た時、三男はどうしても、そのまゝその場を去ることは出来なかつた。『大きい方の子をわたしに負はして下さい』と、三男は懇願するやうに言つた。きみ子は突然同情者が現れたのをどんなにかうれしく思つたでせう。可哀想な子供たちであることを、きみ子はいろ／＼と話して、二人は再び安全な避難地の方へと急いだ。その後二人は餓と疲れとに苦しめられながらも、二兒の世話をし、一夜を明した。それから三日目二人は漸く藤棚の巡查の派出所に行つて、事情を話し、可哀想な二兒の保護を願ひ出た。巡查達は少年少女の健げな尊い心に涙なしにはゐられなかつた。四人は森巡查の同情で、始めて食事を受け、安らかな夜を明かすことが出来た。餓のために衰弱してゐた赤兒は、ミルクに依つて漸く恢復した。九月七日になつて二兒の父親は、日吉清次氏であることが判つた。父親は涙にくれて我が子を引取つたが、きみ子の兩親も行衛が判らな

み子と三男との美談は、震災を思ひ出すと共に、永遠に人々の心に忘れられないであらう。

一四 柳町 吉田町

吉田町竝に柳町は、伊勢佐木町通りの繁榮に次ぐ大通、本市目抜の場所である。繁榮な町だけに、二百餘名の惨死者を出した。同町は吉田町の裏通りと伊勢佐木町方面との二箇所からの火と、野毛方面から追ふ火に取り巻かれたので、全く親子でさへ助ける暇がなかつたと云はれてゐる。柳橋も都橋も遠くに焼け落ちてしまつたので、野毛方面に避難しやうとした人も、公園の方へ逃げやうとした人も、全く絶望であつた。死に者狂ひになつた町民達は、吉田橋を公園への逃げ道として、それからそれと押しかけたので、橋上も川岸も群集で埋められた。斯る時猛火は用捨なく襲ふて來た。焼死する者、川中に落ちて溺死するものは多數であつた。主なる同町の建物は、清水組の三階建の大建物を初め、共信興信兩銀行等であつた。横濱で知られた義太夫師匠野澤督三氏も惨死した。

一五 櫻木町 一―三丁目 (櫻木驛を含む)

櫻木町の災前戸數百三十戸、人口六百五十人あつた。明治初年の埋立地の關係上、地盤も極めて軟弱であつた爲め、龜裂個所が非常に多かつた。建物は横濱日々新聞社、西本願寺別院、海外渡航検査所、神奈川縣農工銀行、横濱米穀倉庫、横濱市中央職業紹介所等あつたが、海外渡航検査所と横濱市職業紹介所とを残して、他は倒潰又は焼失したのである。この邊は火が割合に遅かつたので、大江橋辨天橋方面から、櫻木町驛を指して避難する群集は、一時驛前の大空地に充滿した。而かも夕刻となつて、この邊も危険になつたので、避難地を東横濱驛構内又は山手方面に轉じた。渡航検査所及び職業紹介所だけは震火災ともに免れたので、後日検査所は本縣廳に、紹介所は三日本市假事務所に當られ、震災救護事務の中心となつた。災後横濱驛前から大江橋に至る個所、電車線路の交通は、全市の要路となつた。

一六 内 田 町

第二方面内田橋、緑町及各驛被害の條を見よ。

一七 東 横 濱 驛

第二方面市内鐵道各驛被害の條を見よ。

一八 野毛町 宮川町 福島町 花咲町 一―五丁目

震災前四箇町は戸數千七百、人口七千六百五十を算した。同町の代表的大建物と目指さるゝものは、先づ野毛町二丁目女子商業補習學校、共信左右田平沼銀行支店、野毛町三丁目子ノ神社税關寄宿舎、酒井病院、小松病院、飯田病院、野毛町四丁目大聖院、横濱水道瓦斯局等であつた。道路は家屋倒潰と水道破裂とのために、避難民を苦しめた。火炎は四方八方から襲つて來たので、逃げ遅れた者は、親子もろ共無殘な焼死を遂げた。最も慘狀を極めた家は、宮川町一丁目二十三番地堀内正宏、宮川町一丁目二十二番地小林喜一郎、同番地高塚菊太郎、二丁目二十八番地關喜二郎、一丁目十三番地粟飯原美太郎、三丁目四十七番地河原伸太郎、一丁目十二番地宮久太郎、一丁目四十七番地館林伊之助、一丁目十三番地澁谷喜作、野毛町一丁目二番地鈴木斧次郎、一丁目二十四番地野呂石松、一丁目二十四番地岡鐘二、二丁目五十一番地増山龍藏、二丁目五十二番地里見友二郎、二丁目五十一番地河合太平、三丁目九十五番地清田久治、三丁目百二十七番地田村新二郎、三丁目百二十七番地最上八祐、四丁目百五十九番地増田和三郎、花咲町一丁目十三番地宮内ヨシ、五丁目七十四番地齋藤佐吉、四丁目五十七番地平田照美等で、累計三百餘名の

焼死者行衛不明者を出した。避難方面は櫻木町省電停車場前、向構内、伊勢山太神宮境内、掃部山、水道貯水池附近、老松町平沼氏邸内、久保山境谷等であつた。當町の救護は應急の施設を行ひ、震災直後九月四日、野毛町一丁目青年會は同町省線敷地に事務所を設け、罹災居住者には、市から配給を受けた物資を分配した。花咲町三四、五、福島町青年會、野毛町三四、四丁目青年會、野毛町二丁目有志會、宮川町宮川會、花咲町一二丁目花咲會、各會とも救護事業に従事した。

一九 日出町

日出町は震災前戸數四百三十、人口は約一千七百五十であつたが、大地震が襲ふと同時に、家屋は倒潰し、死者を夥しく出した。黄金橋朝日橋長者橋の三つの橋が焼失した爲め、同町の避難者は全く逃げる道を失つてしまつた。而し同町方面の人々の中には、隣町と同様、水道貯水池高臺へ逃げた者多く、途中天神坂省線空地等で焼死したものと、その他の所で焼死した者とを合はせると、百四十三名の多數焼死者を出したわけである。町民中には避難地を誤まつて逃れ、逃れて焼死した者もある。一丁目二十六番地先別邸跡の五百坪空地には、三十數名重なり合つて焼死した者もある。二十八番地鐵

道省建築事務所跡には數十名の焼死者が取亂され、その他長者橋附近の焼死者數十名もあつて、同方面は尤も惨鼻の中心となつたのである。死者の中には同町民のみに限らず、他町より押掛け、途中火炎に遮られて、空しくこの地に於て遭難したものもあつた。日出町民中、一家全滅したものは、一丁目二十番地田崎泉一郎氏一家七人、同二十六番地大森久壽猪氏一家五人、二丁目四十二番地大森洋服店一家五人、同岡安喜佐久氏一家四人、二丁目四十四番地高折新吾一家六人等で、その他判明せざるもの二三あつた。

二〇 清水町 霞町 初音町 三春町 黄金町

惨害と遭難の経路は五町皆同様であるので、茲に一緒に述べることにしたい。當日各町とも永く猛火に襲はれ、道路の龜裂竝に埋没等に遭つて、町民たちは避難を遮られたが、漸くにして皆水道貯水池久保山等に避難した。しかし、その他は省線空地、護岸線あるひは途中猛火に襲はれて、天神坂その他の空地で焼死を遂げたのである。左に各町に於ける死者數及び一家全滅を記すことにする。三春町黄金町の焼死者百名であつた中で、一家全滅は、黄金町四丁目十四番地前田氏一家三人、二丁目九番地大谷清氏一家五人、三春町一丁目四番地大須賀鎌吉氏一家六名等數氏で、その他家族一二名の死者

を出した家は澤山あつた。次に初音町では死者八十名で、大部は末吉橋附近で焼死したものと思はれ、同町一家全滅の家は、二丁目二十五番地の藤政一郎氏一家二名である。多數の家族を失つた者は、一丁目四番地の箕輪末吉氏で、六十歳の老人一人を残して、一家七名焼死した。二丁目の村田寅之助氏は、小兒一人を残して、一家三人の焼死、一丁目五番地松原辰次郎氏は二名の子供を残して、一家五人焼死したなど、實に痛ましい。霞町清水町では、死者最も少く、清水町の四名、霞町の二名であつた。

二一 英 町 一—三丁目

震災前の同町の戸數百二十戸、人口六百人であつたが、約三分の二は倒潰し、間もなく猛火に包まれ、町民は逸早く東福寺境内に避難したが、やがて東福寺も猛火に包まれたので、水道貯水池に轉じた。同町居住者の壓焼死者は僅に十一人であつた。

二二 南 太田 町

東耕地 同耕地一帯天神坂左右側の崩壊を初とし、八箇所に大なる土堤崩壊を見たが、人家の倒潰は僅かに二戸で、地盤は殆んど龜裂を生じなかつた。町民は類焼の厄を

免かれると油断してゐたが、初音町方面から北東に向て煽らるゝ猛火は、それからそれと延焼して、間もなく同耕地西部半僧坊中段に火を發し、午後一時頃には焼野原の姿となつた。死者は三四名、負傷者はわづかに三四名であつた。避難民の中、運よく坂路を昇つたものは、水道山貯水池茂木別邸内等に一命を得たが、登り遅れた者約三十名は安部別邸五百坪の空地で焼死を遂げた。

霞谷原兩耕地附近 同方面は戸口の稠密を缺いてゐたお蔭で、震火災の厄を免かれた。然し、震害は他町區よりも激しく、全潰家屋四十三戸、半潰は二百七十戸であつた。地盤の破裂は、二千五十八番地先で、延長約二十五間の大溝のやうな龜裂を生じた。又二千〇八十三番地東福寺墓地附近に、延長約四十間の龜裂と、同二千十五番地先に延長約四十間の龜裂と、千九百七十五番地先電車軌道上に、延長約三十七間の龜裂とを見たのである。斯る災害を被つた上に、清水町方面から襲ひ來た猛火は、俗稱赤門の眞言宗東福寺を初め、附近一帶百四十有餘戸を舐め盡し、赤門谷戸附近四百有餘戸を焼き盡したのであつた。しかし、百餘名の町民は必死となつて、バケツや手桶で、下水の大樹から水を汲み出し、防火に努めた結果、二千十三番地先で火を止めたので、辛うじて延焼を免がれたといふことである。しかし、死者はわづかに三四名しかなかつた。尙ほ救護に

關する諸般の熱心なる活動は、同町青年會員と、衛生組合員とが一致して、水道山西端高地に避難してゐた約六千餘人を親切に世話をした。

西中耕地西部 この地帯は家屋も一樣に小規模で、住民は殆んど勤人であつたから、留守居は女ばかりで、どうすることも出来ない有様であつたが、幸ひ死者は多く出さなかつた。女子供は逃げ場に迷つて、太田小學校、平沼小學校、佐藤氏別邸、その他庚耕地の奥の高臺を目差して逃げたが、猛火に追はれ、途中千六百三十三番地に添ふ道路が崩壊して、危く多數の死者を出さうとしたが、幸ひに助かつた。而し崩壊と共に、千八百三十四番地一棟の家屋が高地絶頂から轉倒して、親子三人埋没したが、母子二人だけは助かり、小供は慘死した。

二三 井土ヶ谷町

大震災が突發と同時に、家屋は倒壊し、火災はそこゝに起つたが、大事に至らなかつた。大建物は、擦絲織物株式會社、東メリヤス株式會社、横濱屠場株式會社、戸田製革工場等であつた。間もなく南方大岡町商工實習學校附近から火災を起して、折しも強烈なる南風に、忽ち大岡町を一紙にし、蒔田町に延焼した。其の間火粉は盛に落ちて來たが、

必死となつて防火に努めたので、幸ひ火災を逃れることが出来た。

三六

二四 弘明寺町

弘明寺町は前田と山ノ下と北ノ前の三字から成つて、震災前全戸數百八十戸で人口は九百名であつた。倒潰した家屋は、全部の約三分の一で、其餘は僅に破損した位のものである。弘明寺は本堂、觀音堂等は災害を免れたが、同寺の横濱最古の建築物として尊稱されてゐる應永十八年建立した楓關門と、貞享元年相州逗子神武寺から受け傳はつた鐘樓とが倒潰したことは惜しいことであつた。同町は二三發火はあつたが、大事に至らず消しとめた。延焼も觀音橋だけで済んだ。従つて焼死者と行衛不明者一名とを出したゞけである。震災直後、同町方面に集合した避難民の數は、觀音境内の千數百名と、前田の約五千坪計りの空地に避難した二千數百名とであつた。同町の根本醬油店では醬油二十樽、諸味六十石、大豆十二石、食鹽二千斤を避難民に配給し、成和商會では石鹼を配給した。震災後かうした美舉は喜ぶべきである。

第二節 慘狀を極めし主なる地帯

吉田橋附近 此橋の附近に群つて來た者は、伊勢佐木町方面の者と、關内一部の者であつた。猛火に逃げ道を遮ぎられた避難民たちは、最後の手段として、河中に飛び込む者もあれば、船に乗り込む者もあつたが、大抵は溺死し、或は船と諸共に焼死した者が多かつた。助つたものは、頭から絶えず水を浴びてゐた少數の者ばかりで、大多數は無残な焼死體を川岸に晒してゐたのである。吉田橋附近、地盤の龜裂、陷没の狀は、殆んど他に其比を見ることが出来ない。就中警察署附近より大岡川沿岸の電車軌道の龜裂、陷没はひどかつた。軌道は釣針のやうに曲り、敷石は四散してゐた、全焼戸數は一萬四千六百九十九戸、全潰が四百八十一戸、橋梁の墜落、燒失が十九であつた。

梅ヶ枝町 本願寺別院の廣庭に、焼死者三百五十餘名を出したことは、眞に悲惨な極みであつた。全身焼け爛れて、男女の見分けのつかない者、或は半焼になつて頭蓋骨が露出してゐる者など、見るに忍びない凄慘な様であつた。本願寺附近の町民は、同所に逃れたばかりに生命を捨てたやうなもので、血氣な者だけ猛火の中を逃げて助つたが、婦女子傷病者は皆焼死したのである。

末吉橋際の省電の敷地 幅二十間以上もある空地であつたので、町民等は附近の街路が非常に狭いものにも願はず、安全な避難地だと思つて、續々と集つたのである。

三七

が、間もなく火炎は八方から起つて、烈風に煽りつけられたので、もう逃げ場もなくなつて、哀れ二百餘名の焼死者を出したのである。尙最後に大岡川に飛び込んで溺死したのも十數名あつた。末吉橋際も、本願寺別院同様に百有餘名の焼死體が発見された。同所に避難したものは、猛火に包圍されて逃げ迷ふ折柄、水道鐵管破裂し、盛に噴水したので、焦熱を避け様と、競ふて其下に集まつた時、忽ち斷水し、再び猛火に追はれて焼死したものだと言はれてゐる。以上末吉橋際よりその附近に亘つては、災後に四百數十名の惨死體を発見されたといふことである。

天神坂 長さ四十間ほどで、石壇造りの狭い、頗る危険な坂であるのに、何故に避難民が斯く集つて來たかといふのに、坂を上げれば水道貯水池や、舊茂木別邸の樹木の茂つた窪地などがあつて、廣々とした安全な避難地であつたからであつた。先づ長者橋方面から死物狂ひになつた避難民が群つて、押し寄せて來た。此等の避難民は、水道山や野澤山を志して坂を登つて行つたのであるが、不幸にも坂の中途に倒潰家屋があつて、道を塞いでゐたので、もう一步も進むことは出來なくなつた。それで先導者は登ることが出來ないと叫んだが、その聲を耳にもせず、日出町方面から逃れて來た町民の群が、後から續々上つて來るので、歸ることも行くことも出來ず、死を待つより外に道はなかつ

た。聽て猛火は四邊を取り卷いた。子を脊に負つて婦人がそのまゝ焼死するといふ、限りなき殘虐な様は幾多演じられた。後に至つて、此處の死體を検したところ、三百以上を算したと云ふ。中には義太夫名流司太夫の家族も、茲で災厄に遭つたと傳へられてゐる。かく惨死の多かりしは、避難者が土地の状況を知らざりしに依れるとの説は、蓋し正鴻を得てゐるのである。故に地理を知つた者は、茂木邸崖の右端雜草を分け上つて、一命を得た者も多數あつたとの事である。

第三節 震災直後に於ける主なる避難地

吉田橋際より港橋に至る間及船舶内	約五十名
久保山横濱孤兒院	約五十名
同 妙音寺境内	約八百五十名
同 東光寺内	約千五百名
平沼小學校	約三千五百名
兵隊山上下地	約二千五百名
南太田久保山畑地	約三萬五千名
太田小學校	約二千五百名

同地 殘存家屋内	約二萬五千名
南吉田方面千歳橋變電所	約千名
同 和田製材所	約千五百名
同 共進橋附近	約二百名
同 御三の宮附近	約千三百名
弘明寺町一帯	約千八百五十名
同 觀音境内	約五百名
井土ヶ谷一帯	約四千名
櫻木町東横濱驛構内	約千五百名

四〇

第二章 本市第二方面

戸部町自一丁目至七丁目―花咲町自七丁目至十二丁目―櫻木町自四丁目至七丁目―内田町自六丁目
至八丁目―橋町―緑町―入舟町―長住町―高島町自一丁目至八丁目―妻高島町―妻高島町一部―淺間
町―岡野町―南北幸町―輕井澤―平沼町―西平沼町―材木町―仲町―尾張屋町―西戸部町―久保町―
伊勢町―老松町―月岡町―宮崎町―南太田町一部

第一節 一般概況

第二方面は市の西北部を占めてゐる廣い地域である。南方は人家が多くあるので、その方面が激烈であつたことはいふまでもない。此一帯は同様火災を併發して、丘地の一部にも延焼した。其の慘害も他の方面と同じやうに激しかつた。當地の被害状況に就いて述べると、皇太神宮・杉山神社は全焼し、寺院は全焼六箇寺で、火災を免かれたのは四箇寺であつた。戸部警察署第一消防署横濱稅務署專賣局出張所横濱驛前郵便局等は全焼に及んだが、半壞の所も少くは無かつた。傷者は十二名を出したのみで、死者は一人も無かつた。次に工場としては、古川電氣工業株式會社同會社ケーブル工

四一